人権つうしん

2004年 秋号

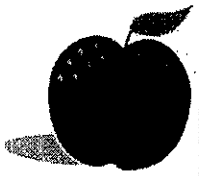
みんなで人権について考えてみませんか？・・・

平成１６年（2004年）９月１日発行
（年２回発行予定）　通算３０号
発行　長野県教育委員会文化財・生涯学習課
発行人　　両角奎吾

長野市大字南長野字幅下６９２－２
電話　０２６－２３５－７４３７
FAX　０２６－２３５－７４９３
Eメール　bunshou@pref.nagano.jp

ある日電車で・・・

～おばあちゃんと若者のホッとする話～



「今日は疲れたなあ。ふう～。」本を読んでいた私の席のすぐそばでおばあさんが、車内の通路に、大きく息をついて立っていました。ちょうど私の隣の席が空いていたので、私がそちらへ移動したら、おばあさんはニコッと笑い「ありがとうね。」と言って、私がかけていた席にすわってくれました。

四人がけのボックス席で、実は私のすぐ前には若い女性がすわっていて、さっきから盛んに携帯電話のキーをたたいていました。私が移動したことにより、おばあさんはその女性と向かい合ってすわったのです。

とても気さくなおばあさんで、席にかけたと同時に、「若いっていうのはいいねえ。私らのころは携帯電話なんてなかったからねえ。」とその若い女性に声をかけました。私はその時『最近の若い女性はきっと無視するか、ろくな返事も返ってこないか、どちらかだろうな。』と内心思いました。

ところが、その若い女性は携帯電話を操作する手を休めて、おばあさんにニコッと微笑みかけたかと思うと、「はいっ」と返答しました。茶髪にピアス、二〇歳くらいで今風の女性からの爽やかな言葉に、私は一瞬驚いてしまいました。

「携帯電話は月にだいたいいくらくらいかかるの？二万円とか三万円かかるってきいたよ。」

「私はそんなにかからないんですよ。家族割引の範囲で使うようにしています。」

「えらいねえ。」

「私の友だちもみんなそうですよ。」

私の予想はまったく外れ、おばあさんと女性はとても話が弾んでいます。

「どこまで帰るの。」

「はい、小諸まで帰ります。」

「遠くまでたいへんだね。毎日通っているの？」

「はい、四月からなのでもう慣れました。」

すると、シルバーカーのバッグの中をごそごそとさがしていたおばあさんが、大きなリンゴを取り出し、

「これねえ、さっき善光寺の出店で買ってきたんだけれど、『つがる』っていって、私、とっても好きなんだけど、一つあんたにやるよ。」

その女性はにっこり笑って、

「おばあちゃん、ありがとう。私、リンゴ大好きなんです。いただきます。」

『女性はきっと断るだろうなあ。遠慮するだろうなあ。』と思っていた私の予想とはまったく反対でした。

おばあさんは、うれしそうに

「実はねえ、大きいものだし、若い人だし、本当は遠慮されたらどうしようかと思ったんだよ。年寄りはねえ、喜んでもらうのが、うれしいんだよ。本当にありがとね。ナイフもあるから、ここで切って食べるかい？」

「いいです。うちへ帰ってから、家族でゆっくりいただきます。」

女性はうれしそうにそのリンゴを自分のバッグにしまいました。

しばらくして、おばあさんは降りる準備をし始めました。

篠ノ井駅に着き、女性はシルバーカーを降ろす手伝いをしながら、「気をつけてね」と声をかけ、おばあさんもにっこり笑って手を振っているのが遠目で見えました。

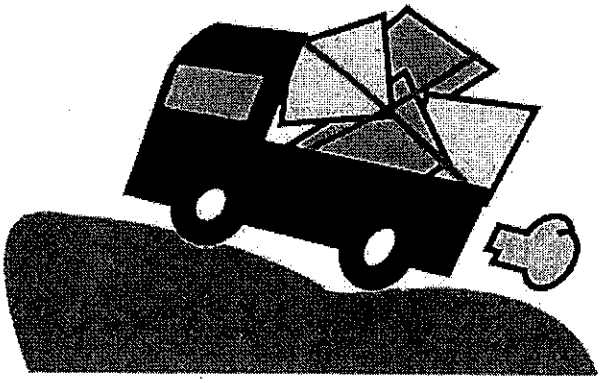
一人になった女性は、再び携帯電話を取り出しました。メールを打つ手はさっきの早さを取り戻しました。

帰りの電車の中での一コマ、気持ちのいい時を過ごすことができました。

じんけんメッセージ

軽トラックに乗る人はどんな人？

定年を機に、車を買い換えました。
新しい車は、軽トラックにしました。使い勝手と経済性を考えてのことでした。
車を新しくしてから体験したことを２つお話しします。
一つは、知人の問いかけです。決まってこう聞かれます。
「田んぼ、やってるの？」
「畑、やってるの？」
私は、別に田んぼも畑もやっているわけではありません。
軽トラックは、農業で使うことが多いので、つい、そういう問いかけになるのでしょう。
誰一人として、
「いい車、買ったな」
と言ってくれないことが、乗用車として乗っている私にとっては、少々不満です。
もう一つ、あまりおもしろくないできごとがありました。
それは、ある会に来賓として出席したときのことです。よく知っている会場でしたので、案内状に指定してあった来賓用の駐車場に向かっていきました。
すると、途中で案内の方に止められ、駐車券の提示を求められました。あわててカバンを開け、言われるままに駐車券を見せ、通してもらえました。
前後の来賓の車は止められることもなく、駐車していきます。参加者の中に、もう一人軽トラックで出向いた方がいました。この方は、私の先輩に当たる方ですが、やはり駐車券の提示を求められていました。
『軽トラックに乗って出向いてくる招待者はいない』そんな思い込みが、この案内係の方の中にはあったのだと思います。
軽トラックに乗っていると聞いてあなたはどんな人をイメージしますか？　自分の思い込みや決めつけで、他人に不快な思いをさせてはいないか、自分自身も振り返ってみないといけないなあと考えさせられるできごとでもありました。



手と手をふれる・にぎる・むすぶ・つなぐ・かさねる・そして　伝わる・・・

～（有）宅幼老所『かいご家』の「介護」にふれて～

梅雨の中休みとなったある土曜日、南箕輪村の有限会社『かいご家』におじゃましました。

『かいご家』は民家を利用して造られた宅幼老所です。

かいご家の開所は介護保険制度が始まった二〇〇〇年の二月に遡ります。十七坪足らずの小さい普通の民家を借りて宅老所をスタートさせました。六畳二間と四畳半、それに台所・トイレ・お風呂がある賃貸の一軒家です。普通の住宅で障害のあるお年寄りを預かる宅老所を始めたのですから地域の人々は驚きました。しかし、利用者は一人、また一人と増えていき、地域の人々もいろいろな人が顔を出しつながっていきました。自分の畑で収穫した野菜を差し入れしてくれる人、材料持参で昼食を毎日作りに来てくれる人、畑仕事に手を貸してくれる人、利用者の話し相手になってくれる人、近所の人が散歩がてらに立ち寄る姿が増えていきました。借りていた建物は手狭になり、二〇〇二年の一月に、現在の場所に移転しました。その頃は、車いすや痴呆のお年寄り、知的障害児童が生活をしていました。現在では、痴呆のお年寄りから元気なお年寄り、小児マヒ、自閉症、知的障害ある青年、そして子どもたちでにぎわっています。それぞれがそれぞれの方法で自分の存在をアピールしているように見えます。このような福祉活動を最近は「共生ケア」と表現するようになりました。

一口に「介護」と言っても、その必要とするケアの内容はさまざまです。一人一人、身体の状態も、したいことや好みも皆ちがいます。「ちがい」を大事にした介護、一人ひとりのニーズに応えて、『いつでも、誰でも、どこでも』自分らしく生きているという実感が得られるような介護をしたい。そんな「身近で小さな福祉」をという願いから造られたのが、この宅幼老所「かいご家」なのです。

代表のUさんは、『かいご家流』の介護」の特色として、「少人数」「普通の家」「家庭的」「利用者主導」の四つをあげてくださいました。

「利用者主導」とは、ここを利用する方たちが、自分のやりたいことやできることを自分の力でやっていくこと。つまり、初めから用意されたメニューがあるのではなく、利用する個人の要求に応えたり、共に生活する集団の思いに応えたりするところに事業（メニュー）が生まれます。それは個の自立であり、居場所であり、共生の姿なのです。『かいご家流』の介護」には、みんなの笑顔がありました。それは、「介護のための介護」ではなく、人として共に生きる意味を見いだす「共生、自立の介護」だからなのでしょう。

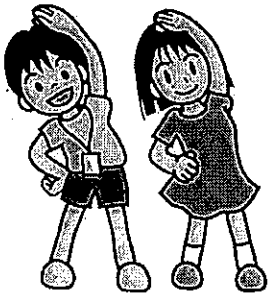
宅老所『かいご家』には、十八名のスタッフが働いています。このスタッフの皆さんもまた「自分の人生経験を豊かにするため、自分には何ができるか、自分探しの一つ」として選んだ「仕事」なのです。

利用者も、おしゃべりを楽しむ人。将棋を指す人・・・。利用者は、ここでそれぞれの過ごし方をしていきます。

宅老所『かいご家』には障害のある子どもも通ってきます。

『障害があってもなくても、歳をいくつ重ねても、いつまでも住み慣れた地域で暮らし続けていくために・・・手と手をふれる・にぎる・むすぶ・つなぐ・かさねる・そして伝わる・・・』これが『かいご家』の思いです。生きている日々の中で、笑いあり、涙あり、人と人が支え合い助け合いながらさまざまなドラマが生まれる・・・そんな素敵な大家族。それが『かいご家』なのです。

「誰もが住み慣れた地域で生活できる、働ける、育つことができる、一番いいんですよね。自立していくための補助がしたいんです。」とUさんは語っています。



なぜ、名字を変えなきゃいけないのか

～友だちの結婚～

彼は同和地区出身で二六歳です。

結婚しようと考えている彼女がいます。そして、悩んだ末、同和地区出身であることを、彼女に伝えました。彼女は少しも悩む様子もなく彼の立場を受け入れました。彼はそのことがとてもうれしく、これから二人で幸せな生活を築いていこうと希望にもえていました。

そして、まず彼女を自分の家に招待しました。彼の両親もとても喜んでくれ、たびたび彼女を夕食に招いたり、家族のようなお付き合いが始まりました。

しかし、彼にとって、少し気がかりなことがありました。彼女の家に一度も行っていないことです。それはとても勇気のいることなので、彼もなかなか言い出せませんでした。でもそろそろ彼女の家を訪問し、ご両親に自分の気持ちを伝えたいと思ったので、ある日、彼女に自分の気持ちを話しました。

彼女は、

「両親はいつでも来てもらいたいようだったけどちょっと気になることを言っていたの。私が名字を変えずに、あなたが名字を変えてほしいみたい。私はどちらでもいいんです。あなたと結婚できれば・・・」

と彼女は彼に打ち明けました。彼も結婚さえできればどちらでもいいと考えていましたが、なぜ、それほどまで名字にこだわるのか、彼女に聞いてみました。

彼女は、

「父も母も私があなたの名字になるのがイヤみたい。私は結婚さえできれば幸せよ。どちらでもいいと思う。」と言っていたようですが、彼には納得できません。

彼女の両親は彼女を同和地区の名字へ嫁がせるということに抵抗があるのか。だとすれば、それが、差別する心なのか。

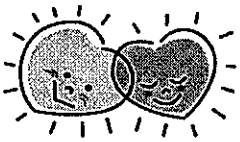
「なんで名字を変えなきゃいけないのか」彼は私にも悩みを打ち明けました。結婚できればどちらでもいいと彼は言っていますが、もしかしたら、これが部落差別かもしれない。彼のためになんとか解決できないか、私も彼といっしょに悩む日々が続いています。

この作品はアフリカのタンザニア出身で、三水村に住む小林フィディアさんの生き方をとおして、民族や文化の違いを越えて「共に生きる」大切さを私たちに語りかけています。タイトルの「ソーテ・サワサワ」は、フィディアさんの母国語であるスワヒリ語で「人間の価値はみな同じ」という意味です。たとえ肌の色が違い、言葉が違い、国籍が違っても人間の価値は同じだとフィディアさんは話しています。

長野県同和教育推進協議会の新しいビデオ

「ソーテ・サワサワ

人間の価値はみな同じ」



この作品はフィディアさんの小学生へのやさしい語りかけから始まり、子どもの未来に希望を託した語りで終わっています。日本で暮らす外国籍の方々が体験したことをフィディアさんのやさしい語りを中心に映像化しています。ナレーションもわかりやすいので小学生から大人まで幅広く活用することができます。学校での人権教育や企業・地域の研修などに役立ててください。

問い合わせは・・・
長野県同和教育推進協議会へ
０２６－２３４－６９０７